

今を生きたい

奨励	川満 直樹〔かわみつ・なおき〕
奨励者紹介	同志社大学商学部専任講師
研究テーマ	パキスタン財閥の形成と発展

わたしはあなたを固くとらえ
地の果て、その隅々から呼び出して言った。
あなたはわたしの僕
わたしはあなたを選び、決して見捨てない。
恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。
たじろぐな、わたしはあなたの神。
勢いを与えてあなたを助け
わたしの救いの右の手であなたを支える。

（イザヤ書 41章9―10節）

今日、私がお話をするテーマですが「今を生きたい」です。「今を生きたい」というテーマだと、大きく二つのお話ができると思います。一つは「今のときを大切に生きなければいけない」、なぜ大切に生きなければいけないのか、というお話と、そして二つ目は「私自身が今をどのように生きたいのか」というお話です。今日、私がお話するのは後者のほうで「私が今をどのように生きたいのか」ということについてお話をしたいと思います。

川満ゼミの研究テーマ

実は、数年前から商学部の私のゼミ（演習）で「企業者史」をテーマにしてきました。そのテーマのもと、企業家の人となりなどをゼミ生と研究しています。簡単に言うと松下幸之助や本田宗一郎や稲盛和夫など、ビジネス界で成功した方々のサクセスストーリーを研究しているということです。
その際の私の興味関心は、先ほど挙げました松下幸之助、本田宗一郎や稲盛和夫が何をしたのか、彼らがどのようなビジネスを行ってきたのかなどではなく、なぜ彼らにヒトがついていったかです。松下幸之助や本田宗一郎は誰もが認めるビジネス界の成功者です。しかし、彼らの成功は彼一人の力で成し遂げたものでしょうか。彼ら一人であのような巨大企業を作り上げることができたのでしょうか。たぶん、一人では成功することも、そして企業を作り上げることもできなかったと思います。多くの人に支えられ、仲間と切磋琢磨した結果、我々がよく知る彼らの業績になったと思います。つまり多くの人が松下幸之助や本田宗一郎についていったからこそ、彼らは多くのことを成し遂げることができたと思います。
先ほど申しあげましたように、私はなぜ彼らにヒトがついていったのか、そこに興味があります。松下幸之助や本田宗一郎にヒトがなぜついていったのか。その理由は無数にあると思います。ゼミでの研究の結論ではありませんが、私は彼らに「人徳」があったからだと思います。

「人徳」とは？

では、「人徳」とは何でしょうか。ゼミで使用した「人徳」について書かれている文章を今日は二つほどお持ちしました。そのなかから抜粋してお読みします。
最初に稲盛和夫が書いた「徳に基づき、組織を治める」という文章です。

組織をまとめていくには、「力」で治めていく方法と、「徳」で治めていく方法があります。換言すれば、集団の統治には、徳に基づく「王道」と力に基づく「霸道」という二通りの方法があるのです。（中略）
「徳」とは、中国では古来、「仁」「義」「礼」という三つの言葉で表されていました。
「仁」とは他を慈しむこと
「義」とは道理に合うこと
そして「礼」とは礼節を弁（わきま）えていることです。

また、この「仁」「義」「礼」、三つを備えた人を「徳のある人」と呼んでいました。
つまり、「徳で治める」とは、高邁（こうまい）な人間性で集団を統治していくことを意味するのです。（中略）
実際に、経営者の人格が高まるにつれ、企業は成長発展していきます。私はそれを、「経営はトップの器で決まる」と表現しています。（中略）経営者の人間性、いわば人としての器の大きさにしか企業はならないものなのです。（稲盛和夫「徳に基づき、組織を治める」『致知』通巻387号 致知出版社 2007年10月）

稲盛和夫はこの文章のなかで、組織を治めるためには二通りの方法があり、一つは「王道」、もう一つは「霸道」であると述べています。
次に、もう一つの文章は、山本七平の本からです。人望の条件として「徳」をあげ、「徳」を次のように九つにわけ（九徳）述べています。

- （1）寛（かん）にして栗（りつ）（寛大だが、しまりがある）
- （2）柔（じゅう）にして立（りつ）（柔和だが、事が処理できる）
- （3）愚（げん）にして恭（きょう）（まじめだが、ていねいで、つつけんどんでない）
- （4）乱（らん）にして敬（けい）（事を治める能力があるが、慎み深い）
- （5）擾（じょう）にして毅（き）（おとなしいが、内が強い）
- （6）直（ちよく）にして温（おん）（正直・率直だが、温和）
- （7）簡（かん）にして廉（れん）（大まかだが、しっかりしている）
- （8）剛（ごう）にして塞（そく）（剛健だが、内も充実）
- （9）彊（きょう）にして義（ぎ）（強勇だが、義（ただ）しい）

「九徳」だけだと読みあげてもなかなか想像しにくいと思います。山本さんは「徳」の反対で「不徳（十八不徳）」についても述べています。たとえば次のようなものです。

- （1）こせこせうるさいくせに、しまりがない。
- （2）とげとげしいくせに、事が処理できない。
- （3）不まじめなくせに、尊大で、つつけんどんである。
- （4）事を治める能力がないくせに、態度だけは居丈高である。
- （5）粗暴なくせに、気が弱い。
- （6）率直にものを言わないくせに、内心は冷酷である。
- （7）何もかも干渉するくせに、全体がつかめていない。
- （8）見たところ弱々しくて、内もからっぽ。
- （9）気の小さいくせに、こそこそ悪事を働く。

（山本七平『人望の研究―二人以上の部下を持つ人のために』祥伝社 2009年 95―103頁を参照）

二つの文章では「徳」について、このように書かれています。先ほどの「王道」と「霸道」の観点からみると、王道を歩むには「仁・義・礼」、そして「九徳」を実践したら近づけるということになると思います。

私は今をどのように
生きたいのか

実は、ここからが本題です。それでは私（川満）は、今をどのように生きたいのか、ということです。私は、そんなに精神的に強い人間ではありません。また日々正しいことだけを行っているような人間でもありません。先ほど私のゼミについて話をしましたが、ゼミ生とともに企業家から「徳」のようなものを学ぼうとしています。当然ですが、学ばからにはそれらを自分自身の中に吸収し、そして実践したいと思っています。

私の周りにも、「この人と一緒に仕事がしたいと思わせる人」あるいは「この人についていきたいと思わせる人」がいます。失敗してもいいから（犯罪などの道理に反することに手を貸すようなことは加担しません）、私はそのような人と一緒に仕事がしたい、などという思いを抱きます。その場合は損得勘定ではなく、目には見えないその人の何かに惹かれているためだと思います。

私も規模は決して大きくはありませんがゼミや講義、また家族など、ある特定の組織とかかわりを持っています。特に、ゼミでの活動あるいは講義などでは私が中心になり指示する場合もあります。どのようにその組織（ゼミや講義など）をまとめるのか。そのまとめ方、あるいは治め方はいろいろあると思います。先ほど申しあげました「王道」「霸道」の観点から述べますと、やはり私は「王道」で組織をまとめるような人間になりたいと思っています。組織内での何らかの力学や弱みにつけこんだり、あるいは何らかの権力をふりかざし組織を治めるほうが容易く、組織を治めるには近道かもしれません。しかし、それでは組織内の人間関係は「その場限り」になってしまうと私は思います。私は、長く続くことのないその場限りの関係はさびしいと思います。

今回、人徳や王道、霸道など大きなお話をしてしまいました。それらについて深い知識をもたない私が、このような大きなお話をしたことを大変恥ずかしく思っています。今回は自分自身に言い聞かせるように話をしました。

もし「今をどのように生きますか」と聞かれたら、今お話をしたようなことを日々思いながら「今を生きたい」と答えたいと思います。

今日はこのような機会を与えてくださりありがとうございました。

2012年9月25日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録